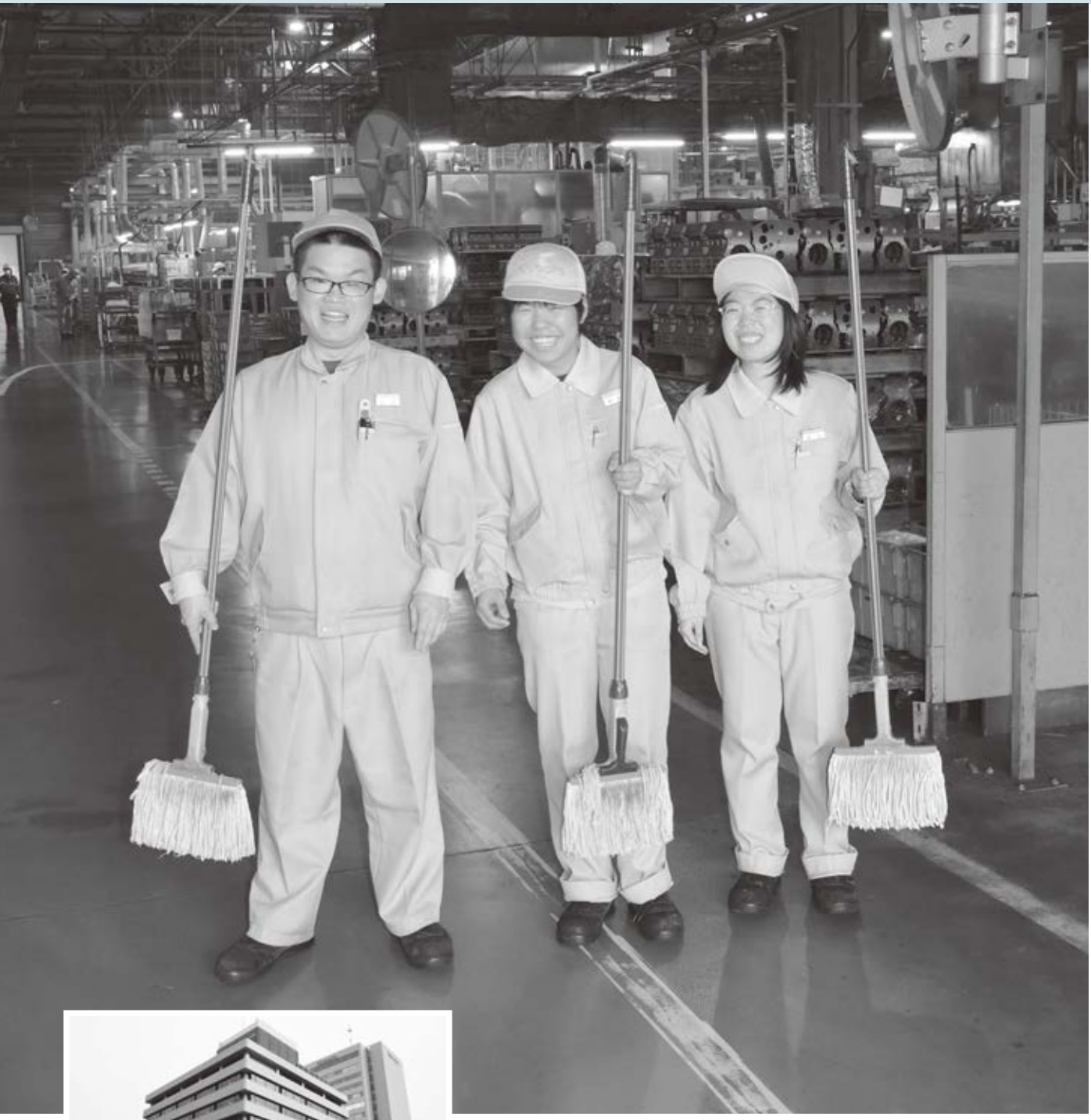
グループの一員として仕事にチャレンジできる人づくり

—クボタワークス株式会社（大阪府）—

職場ルポ

農業機械トップメーカーである株式会社クボタの特例子会社「クボタワークス株式会社」。
社員たちは、職能を磨ける環境で、日々プロ意識を高めている。



（文）豊浦美紀　（写真）官野貴

取材先データ

クボタワークス株式会社

〒556-8601　大阪府大阪市浪速区敷津東1-2-47 クボタ第2ビル1階
TEL 06-6648-2605　FAX 06-6648-3874

Keyword: 製造業、アビリンピック、ビルクリーニング、清掃、印刷、配送

「クボタワークス堺事業所」が入るクボタ堺製造所。
製造・調達部門、研究開発部門、サービス部門が設置されている

POINT

1. 研修会や勉強会で仕事へのプロ意識を高める
2. ビルクリーニング技能検定やアビリンピックに挑戦
3. 会社独自の安全教育やハラスメント撲滅宣言も

広い事業所内で清掃・集配

テレビドラマ「下町ロケット」の撮影に、無人農業トラクターを提供したことで話題になった「株式会社クボタ」（以下、「クボタ」）は、農業機械の国内トップメーカーでもある。クボタが特例子会社「クボタワークス株式会社」（以下、「ワークス」）を設立したのは2002（平成14）年。

ワークスは社員19人（うち障害者11人）でスタートしたが、2019年4月時点の社員数は73人、うち障害者は50人（内訳は身体障害者が4人、知的障害者が44人、精神障害者が2人）まで増えた（グループ6社の障害者雇用率は2019年4月時点で2・44％）。事業所も、大阪市浪速区のクボタ本社と同じ敷地内にある本社事業所をはじめ、堺、堺臨海、枚方、ケミックス堺のほか、4月からはクボタの事業所・工場のある恩加島、本社阪神、久宝寺、筑波が加わり計9カ所まで拡大してきた。主に、クボタグループの事業所・工場内の清掃業務を中心として、郵便物の仕分け・配送、名刺・文書印刷、軽作業などの業務を行っている。

まず、ワークスの堺事業所があるクボタ堺製造所（大阪府堺市）を訪れた。ここは1937（昭和12）年の操業開始から長い歴史を誇り、機械事業部門の「マザー工場」と呼ばれている。東京ドーム4倍超にもなる敷地内で約2500人が働いているという。2016年、その一角にワークスの堺事業所が開設された。現在、指導員を含む12人が配属され、事務所棟内のロビーや会議室、トイレ、更衣室などの清掃業務と、敷地内に散在するグループ21部門の集配業務を担当している。清掃と集配は毎日、午前と午後の交代制で全員が行うことになっている。

午前9時半ごろ、エンジン組立工場と研究開発部門棟の間の通路で台車を押していたのは南剛輝さん（22歳）と山本弘樹さん（21歳）。台車に載せられた大きな青い箱のふたを開けてもらうと、手さげカバンがぎっしりと詰まっていた。配達先の21部門別のカバンで、それぞれに郵便物などが入っている。エレベーターで各階に行き、2人で手分けして各フロアの担当者に直接手渡したり、専用の場所に置いてきたりする。配り終えるとそのまま事務棟に移動し、今度は整理棚に新しい郵便物などを仕分けていく作業を手際よく始めた。

南さんは、地元の職業能力開発校に半年ほど通ってから、最初に食品工場に就職したそうだが「2日で辞めてしまいました」と明かす。同工場では衛生上の理由でマスクと帽子を着用するため「みんなの顔がよくわからず、マスク越しに話される内容も、よく聞き取れなかった」ことから、コミュニケーションに不安を感じたのだという。再び職業能力開発校に戻ったところ、以

社内便の集配業務に就く
山本弘樹さん（左）と、南剛輝さん（右）

工場内で集配する２人

営業課長の松下勝章さん

堺臨海工場では、小型汎用エンジンなどが製造されている

堺製造所で清掃を担当する田村彩さん（左）、三井愛さん（中央）、松田夏希さん（右）

休憩時間に遠藤勇士さん（右）とコミュニケーションをとる主任の曽和喜久蔵さん（左）

前に実習経験のあったワークスから声がかかった。ワークスの営業課長として社員指導にもあたっている松下勝章さんからの推薦だった。

「実習時に出してもらった南さんの履歴書に、朝刊の新聞配達を3年間続けたと書いてありました。増員が必要になったとき、そのことを思い出したのです」

南さんも「新聞配達のおかげなのか、集配先を覚えるのも台車を押して回るのもまったく苦ではありません」と笑う。ちなみに南さんはマラソンが趣味。前回出場した大阪マラソンでは同僚たちの寄せ書き入りのTシャツを着て、沿道から声援を受けながら完走したそうだ。

一方で「私はインドア派です」と笑う山本さんは、「仕分作業は時期によってとても量が多く、たいへんですが、やりがいもあります。職場の人たちがみんな優しいので、ここに就職してよかったなと思います」と話してくれた。

午前10時半にいったん全員が事務所に戻り、休憩時間をとる。20歳前後の若い社員が多いためか、冗談も飛び交う学校の教室のような雰囲気だ。みんなをまとめているのは主任の曽和喜久蔵さん（61歳）。定年後に再雇用されたベテラン社員だ。機会を見つけては社員たちを近くのお好み焼き屋に連れていったり、一緒にカラオケを楽しんでいるという。松下さんは「社員を見守り世話を焼いてくれる曽和さんの人柄が、現場をうまくまとめてくれているのだと思います」と話す。

ベテランを新事業所に送り出す

堺事業所開設から2年後、車で15分ほどの距離にあるクボタ堺臨海工場でも、清掃・集配業務の一部をスタートさせた。まず先輩メンバーたちが順番に担当してみることにし、1カ月後には先輩2人と新人1人、指導員1人が堺臨海工場に直接通う形をとった。大きな生産工場内にある手洗い場や廊下は、工場の油などが混じった汚れもあり、清掃の重要度も高い。

先輩メンバーの一人、山中淳暉さん（22歳）は先日、入社3年目にして母校の東朋高等専修学校から依頼され、講演を行ったそうだ。在校生徒や保護者ら50人を前に、マイクロソフトのパワーポイントを使い、ワークスの紹介や自分たちの仕事などについて1時間ほど話した。堺臨海事業所主任の宮田浩二さんたちと一緒に資料をつくり、出張扱いで講演に臨んだという。

「講演は緊張しましたが、よい経験になりました」と話す山中淳暉さん（写真提供：クボタワークス株式会社）

「私自身、クボタワークスに正社員で就職してから楽しく働けているので、後輩たちのほか、保護者にも希望につながる話ができたと思います」と山中さん。

村松愛さん（23歳）は「最初はトイレの場所や確認作業、工場内を回るルートなどを覚えるのに苦労しましたが、いま

堺臨海工場で清掃を担当する村松愛さん（左）、山中淳暉さん（中央）、井上なつきさん（右）

堺臨海事業所主任の宮田浩二さん。山中さんとともに、出張報告書もまとめた

代表取締役社長の酒井直人さん

ビルクリーニング技能検定に向けた講習会では、ポリッシャーの使用方法などを学んだ（写真提供：クボタワークス株式会社）

配管資材の開発・製造を行う株式会社クボタケミックスの堺工場で、清掃を担当している（左から）主任の小松原朗弘さん、長岡佳雄さん、阪本花さん、指導員の岩本弥生さん

はバッチリです。仕事での目標は、（世界トップレベルの清潔さで知られる羽田空港の有名な清掃員）新津春子さんのようになることです。あこがれています」と笑顔で話してくれた。

仕事へのプロ意識を育てる

ワークスでは、社会や会社、仕事のルールを守りながら「やる気」を持って新しい仕事や技能にチャレンジしていけるよう、社員教育にも力を入れている。事業所ごとに開かれている月1回の勉強会ではドキュメンタリー番組などを一緒に鑑賞しながら、職場内で気をつけること、同僚たちとのチームワークのあり方などを学び、仕事に対するプロ意識の向上も目ざしている。前出の新津春子さんのことも勉強会で紹介し、社員の間で「清掃でトップレベルを」という意欲が生まれているという。

さらに2018年からはビルクリーニング技能検定へのチャレンジもうながしている。呼びかけたのは同年からワークス代表取締役社長をつとめる酒井直人さん。

「清掃専門の講師を外部から招き、希望者に講習会を開催したところ、多くの社員が参加してくれました。ビルクリーニングは覚えることが複雑で、たいへんな部分も多いのですが、社員たちのプロ意識もより高まったようです」

検定は社員13人と酒井さん、松下さんが受験したが、このときは残念ながら全員不合格だったという。実技試験のあとに社員が発した「時間オーバーだった」、「ポリッシャー機器が使いにくかった」などの反省の声をふまえ、今年も引き続き受験する予定だ。

白神和真さんは、本社内で販売されるサンベジファーム産野菜の管理も担当している

初めてのアビリンピック

2018年には、アビリンピックに初めて挑戦する社員も出てきた。「ビルクリーニング」競技で、堺事業所の南さんと山本さんの2人、「オフィスアシスタント」競技では本社事業所の白神和真さん（27歳）が、大阪での地方大会に出場した。南さん、山本さんはそろって銀賞を受賞。白神さんは金賞と、第1位に贈られる大阪府知事賞を受賞し、初の全国大会出場を決めた。

白神さんのふだんの仕事は、パソコンを使っての名刺作成やデータ入力。「オフィスアシスタント」競技の「文書発送準備作業」などは、ほとんどやったことがなかったが、同じ事務所にいる松下さんが白神さんの手の動きを見て「器用かもしれない」と判断し、声をかけたそうだ。しかし、大阪大会の1カ月前に行われた練習会では、白神さんは最下位だった。それからは2人で、速く正確に紙を折る方法を研究したり、名簿リストを素早く見分けるためにスポーツ選手が取り組むビジョントレーニングを行ったそうだ。研究や練習の成果もあり、本番の大阪大会では28人中で見事1位に。初めて参加した、全国アビリンピック

全国アビリンピック沖縄大会で、松下さんらに見守られながら競技に取り組む白神さん

白神さん（右）、三井さん（中央）とともに、社内での練習会に参加する三浦康平さん（左）（写真提供：クボタワークス株式会社）

芦田しのぶさんは、社員と親しみやすい関係づくりを心がけていると話す

朝礼終礼では、ゼロ災運動のスローガンが唱和される
（写真提供：クボタワークス株式会社）

業務部長の日下剛辰さん

沖縄大会ではメダルに届かなかったが、株式会社クボタの木股昌俊（きまたまさとし）代表取締役社長の激励訪問を受けるなど、社内で一躍有名にもなった。業務に張り合いが出て、手応えを感じている。

「アビリンピックに出て結果を残したことで、自分のスキルを社内のみなさんにアピールできたと思っています。もっと磨いていくつもりです」

白神さんの全国大会出場によって、ワークス社員の間でも一気にアビリンピックへの関心が高まった。次回アビリンピックの「オフィスアシスタント」競技には、白神さん以外に2人がすでに立候補、「ビルクリーニング」競技への参加にも10人が意欲を見せている。そこで今年からは社内選考会を実施することが決まったそうだ。

「安全教育」や「ハラスメント撲滅（ぼくめつ）宣言」も

ワークスでは社員教育の強化にも力を入れている。まず「クボタワークスが目ざすこと」を四つ、社員に向けて提示した。①社員全員がクボタグループの一員としてイキイキと働ける会社づくり（会社に行くのが楽しい！）②社会のルール、会社のルール、仕事のルールが守れる風土づくり（良いこと、悪いことをはっきり）③社員全員が高い「やる気」を持って、新しい仕事に、新しい技能にチャレンジする人づくり（みなさんのやる気は大歓迎です）④チームワークの良い、仲間を思いやれる職場づくり（人が嫌がること、いじめや仲間外れは絶対しない）

こうした指針をもとに全社員を集めた研修会を年2回行っている。昨年は初めて「ハラスメント」をテーマにした。この背景について、酒井さんは「社員が急激に増えたことで職場内の人間関係のトラブルもありました」と率直に話す。

「個別に対応・指導をしてきましたが、何がいけないのかを全社員がしっかり理解し、意識を変えてもらう必要があると思いました」

そこで「ハラスメント撲滅宣言」と題した「絶対に言うな！3カ条」と「絶対にするな！8カ条」を作成した。

「言うな！3カ条」は、①暴言 ②動物やほかの人（物）に例える ③相手が嫌がることを言う（家族や好きな人のことをしつこく聞く、触れてほしくないことをいじるなど）

「するな！8カ条」は、①殴る・ける・たたく・胸ぐらをつかむ ②人の体をさわる ③つきまとう ④仲間外れにする ⑤無視する ⑥断られてもLINEなどの交換をせまる ⑦しつこくLINEや電話をする ⑧写真をSNSに投稿しようとする

実際に文言などを作成したのは、業務部長の日下剛辰（くさかよしとき）さんだ。

「何がハラスメントなのか、社員が理解しやすいようになるべく具体的な内容にしました。LINEなどはプライベートな領域ですが、職場で影響が出ることもありますから。職場内でもこの宣言内容を軸にして指導することができ、実際にトラブルもぐんと減りました」

内容を忘れてしまわないよう、毎日の終礼で1項目ずつ読み合わせをするなど、「こういうことをしていませんか」と確認し合っているという。

2019年からは「ゼロ災運動」をスタートさせた。もともとクボタグループで導入されている安全運動の一つ「安全人間づくり」に沿って、職場で安全に作業できるようにする取組みだ。壁に貼られた目立つ配色のポスターには、わかりやすいイラストとともに「元気よく挨拶する」、「手はいつもポケットの外」、「身の回りの整理・整頓・清掃をする」といった8項目の基本ガイドラインが示されている。

グループ会社と同様、朝礼終礼には全員で「ゼロ災でいこう、ヨシ！」と唱和し、当番社員が1項目ずつ読みあげて、確認をうながしている。酒井さんは「私も工場にいたときから続けていましたが、みんなで一緒に大きな声を出すと、仕事への気持ちが引き締まりますし、一体感も生まれます」

また、危険予知訓練も各事業所で行っている。どんなことが危険なのか社員同士で意見を出し合い、社内外での安全意

社員が口をそろえて「楽しかった」と話す
バス旅行での一コマ
（写真提供：クボタワークス株式会社）

株式会社クボタ人事部ダイバーシティ
推進室長の増田卓司さん

久保添優子さんは、業務部長の日下さんとともに
事務全般を取り仕切っている

識の向上に努めているという。

事業所の分散化

2019年4月には新たに12人の社員を迎え、障害のある社員は9事業所で計50人になった。これまで清掃会社から派遣されていた指導員も、頻繁な入れ替わりによる混乱を避けるため、ワークスによる直接採用を進めている。

分散化する事業所と本社のつながりを強化するため、1月にクボタからの出向社員として芦田しのぶさんが配属された。それまで障害のある人とは縁のない職場にいたという芦田さんは、毎日のように各事業所を回り、社員たちと交流しながら名前と顔を覚えてもらっているところだという。「どの社員にとっても、なにか困ったときに話しやすい存在になりたい。事業所と本社のパイプ役としてどんどん動き回りたいです」と意欲を見せる。

車いすに乗る久保添優子さんは、ワークスで15年働くベテラン社員。事務所内では事務全般を取り仕切る大黒柱である一方、「頼れるお姉さん」として社員の実質的な「相談窓口」のような役割も長く果たしてきたそうだ。

「いまではクボタグループの社員が、仕事中に困っていそうな様子のワークス社員を見かけると、心配して事務所に知らせに来てくれることもあります。また、ワークス社員をグループ社内のイベントに誘うなど、日ごろから気軽に声をかけてくれます。グループの一員として認知され、見守ってもらっているなと実感します」

社員が増えたことで、2018年からは団体で親睦旅行ができるようになった。バス旅行の行先は神戸市内の動物園。酒井さんは動物のかぶり物をして園内で隠れる演出を、日下さんはバス内でカラオケやビンゴゲームなどを企画して、社員たちからは大好評だったという。「今年も趣向をこらし、みんなで楽しみたいと思います」と酒井さんはいう。

ダイバーシティ推進に向けて

ワークスは日ごろからクボタ人事部との連携にも努めている。月1回は本社人事部とワークス、もう一つの特例子会社で、野菜の水耕栽培を手がけるクボタサンベジファーム株式会社（2010年に設立。以下、「サンベジ」）による会議で情報共有を行っている。さらにクボタ人事部が中心となって、グループ内での業務の洗い出しやマッチングの可能性を模索しているところだ。2017年からは事務代行などを手がけるグループ会社「株式会社クボタスタッフ」（以下、「スタッフ」）で精神障害者を中心とした雇用拡大も図っている。

クボタ人事部ダイバーシティ推進室長の増田卓司さんは「特例子会社が蓄積したノウハウを活かし、クボタ社内でも障害のある社員がともに働ける環境や合理的配慮のあり方について検討しています。地元の大学や就労支援機関との連携も進んでおり、一般枠での応募者も出てきています。グループ全体での障害者雇用のあり方について、ワークス・サンベジ・スタッフ3社の実績や課題を見極めながら、しっかり前に進めていきたい」と話す。

最後に酒井さんからワークスの今後の展望について語ってもらった。

「ワークスの大きなミッションの一つは、業務を通じグループ内で『なくてはならない存在』になることです。そのためにも柱である清掃業務の質・技能の向上は必須でした。検定やアビリンピックへの参加をうながすことが、予想以上に社員の技能向上に対するモチベーションアップにつながったことを実感しました。清掃業界は人手不足ともいわれているので、ワークスが少しずつ力になっていきたい。また今後は、グループ内でほかにどんな業務ができるかについてもさらに検討します。クボタグループの一員として、一人ひとりが新しい技能の習得や仕事に、いきいきとチャレンジしていけるような職場を目ざしていきたいと思っています」